

Title	ゼンチシク ノ ヒ タイカクセイ ト ギジ ジュドウブン ニツイテ
Author(s)	Honda, Takahiro
Citation	待兼山論叢. 文学篇. 44 p51-p.67
Issue Date	2010-12-24
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/10641
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

前置詞句の非対格性と擬似受動文について

本 田 隆 裕

0. はじめに

通常、受動文の主語になるのは動詞の補部であるが、(1)に示したように、英語など一部の言語では前置詞の補部が主語になる例も存在する。

(1) Mary was talked to (by John).

(1)のような受動文は、擬似受動文 (pseudopassive) と呼ばれており、フランス語などの言語では容認されない。¹⁾

擬似受動文の統語派生を説明した先行研究としては、Hornstein and Weinberg (1981) (以下H&W) がよく知られている。しかし、H&WはGB理論の枠組みに基づいた分析であり、Minimalist Program (以下MP) の枠組みでは廃止されているD構造やS構造といった文法レベルの存在に依存した分析となっている。本稿では、前置詞の格付与について検討し、H&Wの問題点を指摘した上で、MPの枠組みで擬似受動文の派生を説明する。

1. 再分析の問題点

前置詞は、それ自体が補部に格を付与する。非対格動詞 (unaccusative verb) である arrive は内項に対格を付与しないことから、(2)において、the station は前置詞 at によって格を付与されており、また(3)の例から分

かるように、動詞が受動化されても、前置詞 to の補部 (him) への格付与能力は保持されている。

- (2) John arrived at the station.
 (3) The book was given to him.

このような事実からも、前置詞はその補部に、動詞の受動化とは無関係に格を付与していると言える。ここで、(1)の派生は概略(4)のように考えられるので、なぜMaryが受動文の主語になり得るのかという疑問が生じる。

- (4) [_{TP} was [_{VP} talked [_{PP} to Mary]]]

この事実を説明するために、H&Wは擬似受動文が現れる言語においては、(5)に示した「再分析 (Reanalysis)」と言われる規則が存在すると提案した。

- (5) $V \rightarrow V^*$ (where V c-commands all elements in V^*) (H&W: 60)

この規則により、(4)においてtalkedとtoが結合されて一つの複合動詞となり、Maryはこの複合動詞の補部になり、もはや前置詞toから格を付与されないために受動文の主語になると説明できる。

しかし、(2), (3)のような例において、前置詞は派生のどの段階で補部に格を付与するのだろうか。これらの例に加えて、a book about himのような格付与能力がない名詞句と併合 (merge) された前置詞句内においても前置詞は格を付与することから、前置詞句内における格付与は次にどの範疇と併合されるのかということとは無関係である。よって、前置詞は補

部を併合した段階で補部に格を付与すると考えられる。ところが、(5)の規則により擬似受動文が派生されるのであれば、前置詞句が動詞と併合される場合のみ、前置詞は補部に格を付与しないということを仮定しなければならない。つまり、H&Wの分析が成り立つためには、前置詞句の派生が完了し、次に併合される範疇が決まってから、前置詞句内の格付与を決定するような非循環的 (countercyclic) な派生を仮定しなければならない。²⁾

H&Wの分析はD構造やS構造といった文法レベルを仮定しているため、MPの枠組みで捉え直した場合、非循環性の問題を避けられないが、擬似受動文の前置詞が補部に格を付与しないという主張は正しいと考えられる。問題は、擬似受動文の前置詞はなぜ格を付与しないのかということである。2節に示すように、本稿ではMPの枠組みに基づいてこの理由を説明する。

2. 非対格性と格付与

1節で述べたように、前置詞は補部に格を付与するが、擬似受動文における前置詞は格を付与しない。このように補部に格を付与したりしなかったりする範疇は前置詞だけではない。他動詞は内項（補部）に格を付与するが、非対格動詞は格を付与しない。

Chomsky (2001)では、(6a)の他動詞文と(6b)の非対格動詞文の違いは、それぞれの構造における軽動詞 (light verb) の違いとして捉えられている。

- (6) a. John broke the vase.
 b. The vase broke.

他動詞文の軽動詞は v^* と呼ばれ、外項 (John) を投射し、内項 (the

vase) に対格を付与する。一方、非対格動詞文の軽動詞である *v* はこれらの機能を持たない。(7a, b) はそれぞれ(6a, b)の構造である。

- (7) a. $[_{CP} C [_{TP} John_i [T [_{vP} t_i [v^* [_{VP} break [the\ vase]]]]]]]]]$
 b. $[_{CP} C [_{TP} [the\ vase]_i [T [_{vP} v [_{VP} break t_i]]]]]]]$

(7a)において、内項は他動的軽動詞 *v** と一致することにより対格が付与される。他方、(7b)では、内項は *vP* 内で格を付与されない。*vP* はフェイズ (phase) ではないので、内項は *T* にとってアクセス可能であり、*T* と一致して主格を付与され SPEC-*T* に移動する。

ここで重要な点は、動詞句の非対格性というのは *V* そのものではなく、*VP* を選択する軽動詞によって生じるということである。

次に、前置詞の格付与について考えてみる。先行研究では、前置詞と動詞とでは格付与の仕組みが異なるという考えが主流を成している。1節で示した前置詞の格付与についての問題は、基本的にこの考え方を採用しているために生じている。これに対して Kayne (1981) は、英語の前置詞補文標識は隣接する不定節主語に格を付与できるのに対して、フランス語の前置詞補文標識は格を付与できないという事実に着目し、英語の前置詞が動詞と同じように構造格 (structural Case) を付与する可能性を示唆している。

もし前置詞の格付与の仕組みが動詞と同様であるならば、(7)で示した動詞句の構造と平行的な構造を前置詞句にも仮定することができる。従って、構造格を付与する前置詞句の構造は(8)のように考えられる。

(8) [_{pP} (外項) [_{p*} [_{PP} P (内項)]]]

(8)において、 p^* は v^* と同様に、内項への格付与と外項の投射という二つの機能を有する。

Svenonius (1994)は、動詞と前置詞との平行性を仮定した場合、例えば次の文においては、前置詞の補部である *my foot* や *your sweater* が前置詞の内項であるのに対して、*you* や *a bug* は前置詞の外項であると主張している。

(9) a. *You're on my foot.*

b. *There's a bug on your sweater.* (Svenonius (1994: 219))

これらの外項は、Talmy (1978)におけるFigure-Groundという概念のうちFigureに該当し、内項はGroundに該当することから、Svenonius (2003)は、この外項のことをFigureと呼び、内項のことをGroundと呼んでいる。ただし、Svenonius (1994)によれば、Talmy (1978)におけるFigureは前置詞句が修飾する要素 (TP, VP, DP等) を指す場合もあることから、本項では説明の便宜上、前置詞の外項をFIGUREと呼び、内項をGROUNDと呼ぶことにする。よって、(8)は(10)のように捉え直すことができる。

(10) [_{pP} FIGURE [_{p*} [_{PP} P GROUND]]]

さらに、動詞句と前置詞句の平行性を仮定し、本稿では(10)のような構造に加えて、非対格性を持つ(11)のような前置詞句も存在すると提案する。

(11) [_{NP} *p* [_{PP} P GROUND]]

(7b)の非対格動詞句と同様に、(11)の非対格性はPそのものではなく、PPを選択する*p*によって生じている。*p*はFIGUREを投射せず、GROUNDは、非対格動詞の内項と同様に前置詞句内で格を付与されない。(11)におけるGROUNDは*p*Pの外のprobe (*v**やTなど)によって格を付与される。³⁾

以上のように、前置詞句には(10)のように前置詞句内で格が付与されるタイプと、(11)のように前置詞句内で格付与が行われない非対格性を示すタイプがあると考えられる。先に述べたように、擬似受動文の前置詞は補部に格を付与しないことから、(11)の前置詞句のみが擬似受動文の派生を可能にすると言える。これにより、H&Wに見られたような非循環性の問題を避けることができる。次節では、この主張の妥当性を検証する。

3. 擬似受動文の派生

1節では、再分析による擬似受動文の説明に問題があること示した。これに対して、高見(1995)は再分析に基づかない機能文法による擬似受動文分析として(12)の仮説を提案し、この仮説に基づけば、例えば、(13)における容認性の違いを説明できる。

(12) 英語の擬似受身文は、主語がその受身文によって特徴づけられている場合に適格となる。(高見(1995: 59))

(13) a. *This bed was slept near.
b. This bed was slept in. (Couper-Kuhlen (1979: 15-16))

誰かがベッドの近くで眠ったという記述はそのベッドの特徴を何ら示して

いないが、誰かがベッドで眠ったという記述は、ベッドのシーツにしわが寄ったりして、そのベッドがまだ整えられていないという特徴を表しているため、(13b)だけ容認されるということが説明できる。

高見の提案した(12)は、擬似受動文の容認性を正しく予測する優れた仮説ではあるが、擬似受動文の統語構造はどのようなになっているのかという疑問は残っており、また、英語のような一部の言語に限って擬似受動文が可能である理由は不明なままである。

これらの疑問を解決するために、前置詞句の構造に着目し、(13)の統語構造を検討する。まず、(13a, b)に対応する能動文(14a, b)を考えてみよう。

- (14) a. Someone slept near this bed.
 b. Someone slept in this bed. (Couper-Kuhlen (1979: 15))

(14)において、Figure-Groundのペアとして解釈されるペアは二通り考えられるが、まずsomeoneとthis bedのペアが挙げられる。よって、this bedはGROUNDとして生成されている。一方、someoneはFIGUREとして生成されていると考えられるが、(14)では明らかに動詞の外項として生成されている。そこで、本稿では、(14)の文においては、(15)のようにsomeoneにコントロールされるPROがFIGUREとして投射されていると提案する。

- (15) $[_{CP} C [_{TP} [_{DP} \text{someone}_i]_1 [T [_{vP} t_i [\text{sleep}_k + v^* [_{VP} t_k [_{pP} \text{PRO}_j] [P_i + p^* [_{PP} t_i \text{this bed}]]]]]]]]]]]]]$

さて、(14)の派生は(15)しか考えられないだろうか。2節で述べたように、前置詞句には非対格性を示すタイプも存在する。前置詞句が非対格性

を示すタイプの場合、(14)の派生は(16)のようになる。⁴⁾

- (16) $[_{CP} C [_{TP} \text{someone}_k [T [_{vTP} t_k [\text{sleep}_j + v^* [_{VP} t_j [_{pP} P_i + p [_{PP} t_i \text{this bed}]]]]]]]]]]]]]$

(16)において、 p は格を付与しないため、this bedは v^* と一致して対格を付与される。この派生においても、this bedはGROUNDとして生成されているが、前置詞の外項であるFIGUREが投射されていない構造においては、Groundであるthis bedに対して、何がFigureとして解釈されるのだろうか。

Felser (1998)は、一時述語 (stage-level predicate) はTPとVPの間にAspPを投射し、事象項 (event argument) がSPEC-Aspに生成されると主張している。この主張が正しければ、(16)は(17)のような構造になっている。

- (17) $[_{CP} C [_{TP} \text{someone}_k [T [_{AspP} e [Asp [_{vTP} t_k [\text{sleep}_j + v^* [_{VP} t_j [_{pP} P_i + p [_{PP} t_i \text{this bed}]]]]]]]]]]]]]]]$

2節で述べたように、Figureになる要素は前置詞の外項だけではなく、前置詞句が修飾する要素もFigureとして解釈され得る。(17)から派生される文において、前置詞句は「誰かが眠る」という事象を修飾しており、この事象がFigureになっていると考えられる。ここで、FIGUREが投射されない場合、事象項である e がFigureとして機能すると仮定しよう。すると、(17)から派生される文においては、 e とthis bedがFigure-Groundの関係になっており、this bedは「眠る」という事象が起こる地点として解釈される。

係になっているのだろうか。擬似受動文における主語とはGROUNDのことであり、(19)の派生において、事象項eとthis bedがFigure-Groundの関係になっている。この事象項eは、「誰かが寝る」という(13b)の擬似受動文が表している命題そのものである。そこで本稿では、高見が主張する「主語がその受身文によって特徴づけられている場合」とは、GROUNDがeによって表される事象が起こる地点として解釈される場合、すなわち、eとGROUNDがFigure-Groundの関係になっている場合のことでありと提案する。一方、前置詞の外項であるFIGUREが投射されている時は、GROUNDはFIGUREの存在地点としてしか解釈されず、GROUNDが受身文全体と直接関係を持たないため、主語がその受身文によって特徴づけられることはない。このため、(19)の構造によって派生される(13b)の擬似受動文は容認されるが、(18)に示したように派生が破綻する(13a)ではeとGROUNDがFigure-Groundの関係になっていないため(12)にも違反している。このような点から、ここでの統語分析は高見の観察とも合致すると言える。

さらに、高見自身も認めているように、(12)では(20)のような例を説明できないが、このような例についても(13b)と同様の説明が可能となる。

(20) I was spoken to by a stranger. (高見 (1995: 67))

(20)の文は、主語である「私」が何ら特徴づけられていないため(12)に違反しているが、完全に容認される擬似受動文である。本稿の分析に基づけば、(20)のような文では、事象項しかFigureとして解釈されないために、FIGUREを投射しない非対格前置詞句しか現れず、よって擬似受動文が派生されると説明できる。

最後に、(21b)に示したCulicover and Jackendoff (2005) (以下C&J) の

例について検討してみよう。

- (21) a. Bill departed on Tuesday.
 b. *Tuesday was departed on by Bill. (C&J: 207)

(21b)に対応する能動文(21a)においては、前置詞句は外項であるFIGUREを投射せず非対格性を示す μP であると考えられるが、(21b)は容認されず、この例は一見すると本稿の主張に対する反例のように思われる。

ただし、C&Jによれば、(21)の前置詞句はこれまでの例と異なり付加詞である。また、Chomsky (2004)によれば、付加詞の外のprobeにとって付加詞内はアクセス不可能であるために、(21)のTuesdayは μP 内ではか格を付与されないと考えられる。そこで、(21)のような前置詞句内においては前置詞が内項に内在格 (inherent Case) を付与していると仮定する。また、内在格を付与する前置詞を P_{OBL} と呼ぶことにする。よって、(21)における前置詞句は(22)のような構造であると言える。

- (22) [μP μ [P_{OBLP} P_{OBL} GROUND]]

内在格が付与されることにより、TuesdayはTが併合される段階では既に不活性 (inactive) になっている。従って、(21b)の非文法性は、TがTuesdayと一致できず派生が破綻することに起因するものであり、本稿の主張の反例とはならないと言える。

以上のことから、英語には、それ自体では格を付与しないPと内在格を付与する P_{OBL} の2種類の前置詞が存在していると考えられる。

さらに、フランス語などの擬似受動文が不可能な言語の前置詞は内在格を付与するというKayne (1981)の分析に従って、これらの言語では、P

は存在せず、前置詞は全て P_{OBL} であると仮定する。すると、FIGURE が投射される前置詞句は (23) のような構造になっており、FIGURE が投射されない前置詞句は先ほど提案した (22) のような構造になっていると考えられる。

- (23) [_P FIGURE [_P* [P_{OBLP} P_{OBL} GROUND]]]

また、*p** の性質も英語と異なり、FIGURE を投射するだけで格付与能力を持たないと考えられる。⁸⁾

従って、フランス語においては、非対格性を示す前置詞句 (22) が派生の中に導入されても、前置詞の補部は常に内在格が付与されているために、T と一致することができず、擬似受動文が派生されない。このため、フランス語には高見の (12) の仮説が適用されないと説明できる。

4. wh 移動

擬似受動文を許さないフランス語などの言語では、もう一つの前置詞残留現象 (preposition stranding) である (24) のような wh 移動の例も容認されず、また、英語においても (25) のように wh 移動が不可能な場合もある。

- (24) *Quel candidat as-tu voté pour?

‘Which candidate have you voted for?’ (Kayne (1981: 349))

- (25) *What inning did the Yankees lose the ball game in?

(H&W: 56)

前節で提案したようにフランス語における前置詞は全て P_{OBL} であり、(24)

の前置詞句は(22)のような構造になっていると考えられる。また、(25)の前置詞句は付加詞であるので、(24)と同様に(22)のような構造になっており、what inningも P_{OBL} の補部である。これらの例は前置詞残留を許さないが、前置詞を随伴する場合はwh移動が可能となる。

- (26) a. Pour quel candidat as-tu voté?
 b. In what inning did the Yankees lose the ball game?

(H&W: 56)

このような例に対し、Pの補部は、(27)のように前置詞残留と前置詞随伴の両方のwh移動が可能であることから、本稿では(28)の仮説を立てる。

- (27) a. Which bed did you sleep in?
 b. In which bed did you sleep?
 (28) a. P_{OBL} の補部DPのwh素性は $P_{OBL}P$ に浸透 (percolate) しなければならない。
 b. Pの補部DPのwh素性はPPに浸透してもよい。

仮説(28)は P_{OBL} とPそれぞれの語彙特性と考えられる。(28a)により、(24)、(25)が非文法的であり、(26a, b)が文法的である理由を説明できる。また、(28b)は(27a, b)の両方が文法的であることを正しく予測する。さらに、(28a)の仮説により、フランス語における全ての前置詞句と英語の付加詞前置詞句がどちらも $P_{OBL}P$ であるとする分析の妥当性を示すことができる。

5. 結論

本稿では、H&Wの問題点を指摘し、再分析を仮定しない擬似受動文の分析を提案した。前置詞句の構造を詳細に検討することにより、非対格前置詞句のみが擬似受動文の派生を可能にすると提案し、この提案は高見(1995)の観察とも合致することを示した。さらに、擬似受動文を含む前置詞残留現象がフランス語などの言語では見られない理由も説明した。

注

- 1) Kageyama and Ura (2002)では、動詞に統率されていない前置詞句内部から受動化が起こっている文は異常受身 (Peculiar Passive) と呼ばれ、擬似受動文とは区別されている。異常受身は個体述語 (individual-level predicate) になっていることが必要条件であり、助動詞を伴うか現在完了形で現れた場合に容認され、異常受身の主語はInflの指定部に基底生成される。本稿では、異常受身については扱わず、前置詞補部が主語位置へA移動することで生成される擬似受動文のみを扱う。
- 2) 再分析はレキシコンで適用され、(1)における talk to は一つの複合動詞としてレキシコンに存在しているという反論が予想されるが、この主張に対しては(i)のような反例が存在する。
 - (i) Frank talked to Sandra and Arthur ____*(to)Sally.
(Baltin and Postal (1996: 129))
 レキシコンにおいて talk to が一つの複合動詞として再分析されているならば、(i)の二つ目の等位項内の前置詞 to も削除できるはずである。
- 3) 動詞句においてVが*v*または*v*に主要部移動するように、本稿では、前置詞句においてもPが*p**または*p*に主要部移動すると仮定する。
- 4) 本稿では、藤田・松本(2005)に従い、(15)の*v**は音形を持たない同族目的語と一致しており、また、(16)、(17)における*v**はこの同族目的語と this bed の両方と多重一致 (Hiraiwa (2005)) していると仮定する。
- 5) 同じ前置詞 in を用いた文でも、(i)のように someone が Figure である解釈しか存在しない文の派生は、(15)のみが考えられる。
 - (i) Someone slept in London.
 また、英語においては、in + *p** と in + *p* の間における形態的な違いは観察

されないが、一つの可能性として、日本語における後置詞「で」と「に」の違いがそれに該当するのではないかと考えられる。

(ii) a. 昨夜は、ロンドン {で/ *に} 寝た。

b. 昨夜は、このベッド {で/ に} 寝た。

- 6) Felser (1998)では、受動文は事象項を投射しないと考えられているが、Basilico (2003)が指摘しているように、受動文が事象項を欠くという主張の積極的な理由が不明である。実際、受動文は事象項を欠く個体述語とは異なる振る舞いをし、個体述語は特定の時間や場所に結びつけられていない点で事象性がないと言えるが、この点でも受動文は個体述語と異なり事象性があり、事象項を投射していると考えられる。本稿では、Basilicoに従い、受動文は事象項を投射すると仮定する。
- 7) ここでは説明の便宜上、Chomsky (2001)に従い、受動文の軽動詞は非対格動詞文の軽動詞と同じ v であると仮定している。
- 8) Hasegawa (2001)によれば、(i)のような例における v^* は外項投射の機能しか持たず、対格を付与しない。
- (i) Mary (intentionally) moved. (Hasegawa (2001: 10))
よって、外項投射と対格付与は常に連動する必要はないと考えられる。

参考文献

- Baltin, Mark and Paul M. Postal (1996) "More on Reanalysis Hypotheses," *Linguistic Inquiry* 27, 127-145.
- Basilico, David (2003) "The Topic of Small Clauses," *Linguistic Inquiry* 34, 1-35.
- Chomsky, Noam (2001) "Derivation by Phase," in Michael Kenstowicz (ed.), *Ken Hale: A Life in Language*, 1-52, MIT Press, Cambridge, MA.
- Chomsky, Noam (2004) "Beyond Explanatory Adequacy," in Adriana Belletti (ed.), *Structures and Beyond: The Cartography of Syntactic Structures, Volume 3*, 104-131, Oxford University Press, Oxford.
- Couper-Kuhlen, Elizabeth (1979) *The Prepositional Passive in English: A Semantic-Syntactic Analysis, with a Lexicon of Prepositional Verbs*, Max Niemeyer Verlag, Tübingen.
- Culicover, Peter W. and Ray Jackendoff (2005) *Simpler Syntax*, Oxford University Press, Oxford.
- Felser, Claudia (1998) "Perception and Control: A Minimalist Analysis of English Direct Perception Complements," *Journal of Linguistics* 34, 351-385.

- 藤田耕司・松本マスマ (2005) 『語彙範疇 (I) 動詞』 研究社, 東京.
- Hasegawa, Nobuko (2001) "Causatives and the Role of *v*: Agent, Causer, and Experiencer," in Kazuko Inoue and Nobuko Hasegawa (eds.), *Linguistics and Interdisciplinary Research: The Proceedings of the COE International Symposium*, 1-35, Kanda University of International Studies.
- Hiraiwa, Ken (2005) *Dimensions of Symmetry in Syntax: Agreement and Clausal Architecture*, Doctoral dissertation, MIT.
- Hornstein, Norbert and Amy Weinberg (1981) "Case Theory and Preposition Stranding," *Linguistic Inquiry* 12, 55-91.
- Kageyama, Taro and Hiroyuki Ura (2002) "Peculiar Passives as a Individual-level Predicates," *Gengo Kenkyu* 122, 181-199.
- Kayne, Richard S. (1981) "On Certain Differences between French and English," *Linguistic Inquiry* 12, 349-371.
- Svenonius, Peter (1994) *Dependent Nexus: Subordinate Predication Structures in English and the Scandinavian Languages*, Doctoral dissertation, University of California, Santa Cruz.
- Svenonius, Peter (2003) "Limits on P: *filling in holes vs. falling in holes*," *Nordlyd* 31, 431-445.
- 高見健一 (1995) 『機能的構文論による日英語比較』 くろしお出版, 東京.
- Talmy, Leonard (1978) "Figure and Ground in Complex Sentences," in Joseph H. Greenberg (ed.), *Universals of Human Language*, 625-649, Stanford University Press, Stanford, CA.

(大学院博士後期課程学生)

SUMMARY

On the Unaccusativity of Prepositional Phrases and Pseudopassives

Takahiro HONDA

It is believed that pseudopassive sentences can be found only in some languages such as English. To account for the derivation of pseudopassives, Hornstein and Weinberg (1981) suggest a syntactic rule of “reanalysis.” However, when applied to the Minimalist Program framework, their analysis cannot avoid a countercyclic operation. Therefore, under the present theoretical context, we must find another approach to explain the syntactic derivation of pseudopassives.

According to Svenonius (1994, 2003), prepositions may take both an external argument and an internal argument. If we assume a parallelism between verb phrases and prepositional phrases, prepositional phrases that take both an external argument and an internal argument are “transitive” and they assign accusative Case to the internal argument. In addition, prepositional phrases that take only an internal argument are “unaccusative” and they do not assign any Case value to the internal argument.

In this paper, I propose that a pseudopassive sentence is acceptable if and only if the prepositional phrase in it is unaccusative. Since the internal argument of an unaccusative preposition is not assigned Case by the preposition, it can agree with T and become the subject of the pseudopassive sentence.

Moreover, in the pseudopassive, the event argument and the subject, viz. the internal argument of the preposition, correspond to Figure and Ground in Talmy (1978), respectively, because an unaccusative preposition functions as an event modifier. I suggest that the subject is characterized by the rest of the sentence if the event argument and the subject are in a Figure-Ground relation. Thus, we can claim that the syntactic analysis here matches Takami’s (1995) characterization condition.

キーワード：擬似受動文, 前置詞句, 非対格性, 格付与